

## 【論文】

# 幼児の異文化適応過程における意識の発達に関する一考察

桑原晴子

(岡山大学大学院社会文化科学研究科)

幼児の異文化適応のプロセスに焦点を当てた心理臨床学的研究はほとんど見当たらないが、グローバル社会における幼児の異文化適応における心理支援を考える上では、検討が必要である。本研究では事例研究法を用い、1人の幼児の異文化適応のプロセスを意識の発達という視点から検討を行った。その結果、集団の意識と個の意識という対極的な意識を統合し、また国や民族といった表層の差異を越えた、人間としての普遍性の次元でつながりを確立することで、幼児の異文化適応が深化していると考えられた。また、その異文化適応の心理支援の際に配慮すべきことについて検討を行った。

キーワード：異文化適応 幼児 個の意識 集団の意識 普遍性の次元でのつながり

### 1. はじめに

グローバル時代と呼ばれ、他国との境界はほとんどないかのような現代において、幼少期から海外に住み、異文化の中で生きることを求められる子どもたちの数は増加する一方である。文部科学省によると、平成27年4月段階で7.8万人の義務教育段階の日本人の子どもが海外に在住し、毎年1万人を上回る数の子どもが1年以上の長期海外滞在を終え、帰国しているという。また、心理臨床実践の現場では、クライアントの背景にこのような子どもの頃の異文化経験と日本での再適応についてのテーマがあることも少なくない。そのように、子どもの異文化適応については心理臨床学的なテーマとして重要であるにも関わらず、その異文化適応のプロセスとその過程での困難について焦点を当てた研究は、まだ数少ないのが現状である。

先行研究を概観すると、シアトルとシカゴ地域在住の日本人の子どもたちの異文化適応について調査した梶田・川上(1999)や、その研究の一部として、シアトルの日本語授業補習校の小学校4年生以上の児童生徒について学習・言語・アイデンティティの点から検討した梶田・早矢仕(2000)、子どもの異文化適応を仲間関係の発達に焦点を

当てて検討した中田(2002)、アメリカでの在外研究期間中に1家族の子どもたちの異文化適応に関する支援を行った中田(2008)などが挙げられる。他にも、首藤・伊多波(2015)や首藤・近藤・伊多波(2018)があるが、この2つについては、バンコクや上海といったアジア在住の子どもたちの適応について焦点を当てているものの、日常生活の中心的な場が日本語幼稚園、つまり現地社会との接点が非常に限られた子どもたちに限定されている。そして考察でも、駐在員家庭では幼児を現地社会に積極的に連れて行かず、幼児の異文化感情も一様にネガティブであると結論づけており、厳密な意味での異文化適応について検討したものとは言い難い。

また、これらの先行研究のうち、事例研究である中田(2008)を除いて、大半が質問紙あるいはインタビュー調査であり、1人の子どもがどのように異文化適応をしていくのか、そのプロセスについてはほとんど明らかになっていない。中田(2008)は、5歳の子どもを観察は行っているものの、その子どもの子育てに関する母親支援の事例報告が中心である。子ども自身の異文化適応について検討するというよりも、母親自身の異文化適応により焦点が当てられているといえ、子ども、

特に幼児が異文化適応する際に、どのようなプロセスをたどっていくのか、どのような支援が必要なのかは十分検討されているとは言い難い。さらに、先行研究で言われている「適応」とは、教育的な視点が強く、言語や学習面の次元での適応、異文化とどの程度接触するか、それに対して肯定否定といったどのような感情を抱くかという適応の次元により比重が置かれている。このように、子どもの内的適応の次元、特に幼児の意識の発達については先行研究が見当たらず、異文化適応の困難を抱える幼児の心理支援を考えるためには、心理臨床学的視点からの検討が必要である。

筆者は2017年4月から2018年3月に5歳女児を連れ、母子で1年間スイスでの長期研修を行う機会を得た。我が子の観察事例研究ということで、厳密な意味での「研究」ではないというご批判は免れないが、心理臨床学的発達研究は身近な我が子を観察することで理論が発達した理論もあり（ということをお願いに）、以下記録を基に検討していきたい。

## 2. 子育てを巡るスイスの文化的状況

筆者が母子で滞在したスイスという国について、スイスの幼児の子育てを巡る文化的状況についてまず概観しておこう。

スイスは、狭い内陸部の国土（九州より1500kmほど大きい）の中に857万人（2019年6月段階）が住む国で、全人口のうち25%が移民という、非常に多民族で構成される国である。特に筆者が住んだチューリッヒは国際都市であり、多様な人種が共存している。英語が十分使えれば、スイスドイツ語が分からなくても日々の生活にはほとんど問題が生じない。ただし、滞在に必要な書類等は全てドイツ語なので、ある程度のドイツ語能力が必要なのは言うまでもない。

スイスの就学前教育、幼児教育は公立の場合、毎日12時に一度帰宅して自宅で昼食を食べ、週に1日もしくは2日間午後の授業があるという、働く母にとっては優しくないシステムになっている。Hortという学童保育に似た施設があり、自宅で面倒を見られる人がいない場合は、そのHortで昼食を食べたり、放課後を過ごしたりすることもできる。しかし、このHortは大変高額な費用がかかる。現地在住の人であれば収入に依

じて減免を受けるが、1年間の研修で、現地で収入が得られるわけではない筆者は減免を受けられないので、子どもが一食分のランチを食べるだけで約30スイスフラン（当時の日本円にして約3600円）かかる。しかも、それはフルコースではなく、ミートソーススパゲッティとかハンバーガーとか、普通の幼児向けの食事である。ちなみに、スイスは世界で一番物価が高い国に必ずランキングされる国である。

このような幼児教育・子育て支援の状況を知ると、日本の保育園や支援は、はるかに手厚いということがよくわかる。スイスの子育て支援が非常に手薄な中、母子滞在である以上、まずは子どもの居場所をどこに確保するかが問題になった。公立幼稚園とHortの組み合わせだと、午前中の先生と午後の先生が変わるうえ、Hortには曜日ごとに違う複数の先生がいるため、いきなり言葉が全く分からない国に放り込まれる娘にとってはハードルが高すぎると判断した。それゆえ、フルタイムの保育施設を探すことになるのだが、フルタイムの保育施設は私立に限られ、私立はさらに高い。インターナショナルスクールだと年間400万はくだらない（日本だと私立大学4年分の学費である）。モンテッソーリ教育の幼稚園で比較的良心的なところを見つけ（年間250万でまだ安いと思うのは、スイスに適応した結果である）、娘を預ける場所は確保できた。

スイスはモンテッソーリ教育が盛んであり、チューリッヒ州だけでも専門の幼稚園が多数ある。シュタイナー教育など様々な教育法も広く行われているが、その中でモンテッソーリ教育の幼稚園を選択した理由は、娘が一言もスイスドイツ語はおろか英語も話さない段階で幼稚園に通うことになるからである。モンテッソーリ教育は元来ハンディのある子どもたちの教育から始まっていることから、子どもの状況に合っていると感じたためである。また事前に教員とメールでやり取りした際に、この当該幼稚園の教員が、異文化から来る現地語を全く話さない子どもについての造詣が深く、また親の不安に対する的確な共感が可能な人であったことも選択の理由の一つである。

また、平日のモンテッソーリ幼稚園だけでなく、土曜日には2時間だけ行われる日本人学校の日

本語補習校にも通うことにした。これは、特に滞在初期の数か月間、言葉の問題が大きい時期に、週に一度でも日本語で自由に話せる友人がいるほうが望ましいと考えたからである。補習校という選択肢は、ホームシックの契機になるリスクもあるが、1年後には日本ですぐ就学するため、リエントリーショック（海外滞在後に日本に戻ってきたときに感じる心理的なショック）を緩和するための対策でもある。

また、幼稚園以外にも、日本人のベビーシッターの依頼も済ませていた。シッターさんに関しては、やはり海外で子どもと二人だけで過ごしてもらうことを考え、急病などの際に子どもが十分にコミュニケーションでき、身元が明確な方がよいと判断し、スイスの日本人コミュニティのネットワークを活用し、日本の幼稚園教員の資格保持者でシッターをしている女性に依頼することができた。

このように、母子二人での滞在のための準備を整え、子どもの異文化適応のプロセスが始まることになった。以下、子どもはAとする。

### 3. 子どもの異文化適応のプロセス

#### (1) 最初期の混乱

Aは、渡瑞の10日前ほどから夜泣きと夜尿が復活し、母の緊張と不安を敏感に感じ取っていることが伝わった。いくら周囲から無謀と呼ばれる性格の母とはいえ、単身子連れで海外1年間はなかなかのハードルである。渡瑞後、幼稚園初日の前日、翌日の幼稚園を嫌がり、「おなか痛い」など様々な身体症状で不安を訴えていた。その時、筆者の元々の友人（チューリッヒ近郊在住のドイツ移民）が「幼稚園バッグについているプリンセスはスイスの魔法のプリンセスで、Aを守ってくれるよ」という話をしてみたら、とメールをくれた。このバッグは、幼稚園児が毎日スナック（果物、クラッカーやパンなど、砂糖を一切使っていない間食を毎日持参する）を入れていくためのもので、友人がお下がりをもらってきてくれて、本人が大変気に入ったバッグである。Aはそのお話を聞くと、少し元気になったようである。このバッグのプリンセスは、心理的守りとして「移行対象」的な意味を今後持つことになる。この友人一家は常に筆者親子が快適にスイスで滞在できる

よう、何から何まで配慮をしてくれた友人であり、彼らのおかげでスイス滞在ははるかにスムーズにいったので、感謝することしきりである。

子どもは、最初の1週間はお昼寝のときに不安になって涙ぐむことが多かったようだが、先生からは「頑張っていますよ、問題ありませんよ」と聞いていた。この先生は、朝夕のお迎えのとき、いつも笑顔で、「何も問題はない、Aは素晴らしい」と褒めてくれる年配の女性であり、そのあたたかな配慮に母子ともに励まされ、大変助けられた。そのように、幼稚園では必死に緊張しながら頑張る一方で、幼稚園2日目以降、自宅に戻ると、朝も夜も最低1時間から時には2時間号泣し、疲れ果てて夕食も取らず寝てしまう日もあった。この頃のAの語りは、「もう行きたくない、スイスは嫌だ、日本に帰りたい。パパに会いたい、パパにぎゅっとしてもらいたいのにしてもらえない。～ちゃんに会いたい、～先生に会いたい。昨日のランチのチーズが嫌なのに、皆に合わせてお代わりまで頑張った。ママと離れるのは嫌だ。今日はイースターのお祭りで、ウサギが来るのは嫌だ」など、カルチャーショックに典型的な、ホームシックと新たな文化への拒否感が中心であった。食文化は幼児の生活の大きな比重を占めるが、それはカルチャーショックの大きなきっかけになっている。チーズは、スイスの食文化の重要な位置を占め、現地の子ども達は大好きなチーズが日本では珍しいチーズで、Aにとっては疎外感を感じる契機となっている。しかし、この点については、日本の保育園に来た留学生の子ども達が納豆にショックを受けるが、数か月で慣れるという話を日本の保育園の先生に聞いていたので、さもありなん、とこの頃は余裕をもって見守っていた。

このような嘆きの表現だけでなく、はるか前になくなった指しゃぶりも復活し、典型的な退行も起こった。Aは「抱っこ抱っこー」と母がトイレに行くのも追い回し、1歳から2歳の再接近危機、分離不安の時期に戻った印象であった。

元々Aは言語能力が年齢より高く、言葉で自由自在に自己表現するタイプの子どものため、日々の生活で言葉ができないことのフラストレーションがより大きかったのだろう。それを予測し、土曜日の日本人学校補習校に通わせたが、駐在員一家にしる、現地の人と結婚した日本人妻

(夫)一家にしる、他の人は家族全員がそろっているのを見る度に、父の不在を意識化し、父親を恋しく思う気持ちが募ってしまう悪循環にもなった。また、現代は通信方法の向上で、日本にいるときとほとんど変わらない形で日本にいる父親と祖父母と連絡を取ることも可能であったが、最初の2カ月ほどこのような里心を配慮して、スカイプをさせるのは父親だけに限定していた。しかし、愛着対象との直接的なスキンシップの比重が高い幼児にとっては、父と話すことはできても、ぎゅっとしてもらえないということはさらにさみしさを増す経験になってしまったようである。これに関しては、シングル親ではない母子滞在という特殊な条件ゆえに、幼児の適応にネガティブな影響を及ぼした要因であると考えられる。

## (2) 初期の適応のプロセス

### 1. 親と子の異文化適応の相互関係

当初子どもの異文化適応を考えるにあたり、まず母として心がけたのは親自身が現地の人間関係に積極的になじむことである。このモンテッソーリ幼稚園を選んでよかった点の一つは、保護者のネットワークが緊密だったことである。親全員が専門職であり、スイスの中でも恵まれた社会的地位にいる人である。全員が何らかの異文化のバックグラウンドを持っていたため、父と母で子どもに話しかける言語が異なることも多く、ほとんどの子は3か国語もしくは4か国語を操る環境であった。そのように、異文化から来た子どもの理解とサポートが手厚い環境であったことが恵まれていた。筆者も、分からないことがあれば、すぐ他の親に相談させてもらい、スイスの考えではどう理解するのかを教えてもらい、そこから子どもにとっても理解することが必要なことは伝えるよう心掛けていた。

毎日5時の幼稚園終了後には近くの公園で日暮れになるまで子どもたちを遊ばせながら、親達は仕事や子育てのことなどおしゃべりを繰り広げる。基本的にスイスでは父親も定時上がりなので、5時半には大集合する。「育メン」などという言葉はスイスにはない。そして、子育てのスタンスとして、親の世界と子どもの世界はしっかり分離されている。例えば、山の斜面を使ったアスレチックのような公園で、日本であれば「危ないか

ら」と親が目を見ないような状況であっても、よっぽど何か起こらない限り、基本的に子どもたちが親から見えないところで遊んでいても放置であることは、筆者にとっては新鮮だった。スイスの子育てで最も重視されるのは「自立」である。日本では絶対一人で歩かせないような幼稚園児でも、一人で通園することが基本である(遠方の私立幼稚園に通う場合は当然親が連れていく)。

Aの日中の様子は、他の子ども達からの話としても聞くことができる。また他の保護者達は、「Aの適応は素晴らしい、こんなこともできるみたいだよ」という言葉かけを頻繁にし、非常にサポート的な関わりをしてくれた。そして、Aには、お友達がそのようにAのことを理解してくれていること、お友達のご両親たちもAのことを見守ってくれていることをしばしば伝えたことが、日々不安を感じるAにとっては守りの感覚を育むことにつながったようである。また、まず親同志が関係を築いたおかげで、幼稚園通園後の初めての週末、自宅にお呼ばれすることになった。その自宅にお呼ばれする経験は、Aにとっては自分がここで歓迎されているという実感を持つ契機になったようである。

### 2. お休みと混乱の深化

その後幼稚園に少し慣れ始めたときに、イースターで5日間のお休みが入った。スイスの学校の休暇はキリスト教の影響が大きい。この間にSechselaeutenというスイスのお祭りを初めて見学した。スイスの人のメンタリティを理解するうえで大切な異文化体験であり、スイス滞在中は積極的にお祭りに行くようにしていた。藁で作った大きな雪だるまBoeoeeggを燃やして、頭が爆発するまでのスピードでその年の夏の天候を予測するという何ともワイルドなお祭りであるが、Aも面白かったようで、一見スイスの生活を楽しみ始めたかのように見えた。

しかし、この休みの後は振出しに戻る、であった。スイスでの幼児の異文化適応を阻害する要因の一つは、この学校教育の休みの多さである。とにかく働く親を悩ますのが教育の休みの多さであり、その度に子どもをどうするのかで働く親達が苦勞することになる。カルチャーショックに関して論じたOberg(1960)は、カルチャーショックの第1段階を観光旅行のような「ハネムーン

期」とし、その次の第2段階に本格的な「ショック期」を想定した。新しい文化を敵視し、ステレオタイプ的にとらえることが特徴とされる。幼児であるAにおいては、大人とは異なり、最初から「ショック期」が前景に出ていたが、途中短期間だけ「ハネムーン期」を挟みながら、「ショック期」が深化していくことになった。

この休み以降は、それまではなかった、幼稚園に通う道中も泣き続ける状態になった。泣きながら、しかし母は日中仕事に行かなければいけないと分かっているのに、幼稚園には行かないとは言わないのである。実際、日中は大変元気だといい、放課後遊びも元気に遊んでいる。まさに不登園状態であり、心理臨床家としては迷うところであるが、母としては、異文化適応のプロセスで誰しも通る混乱の時期と捉えていた(自身が高校留学していたときの経験から、カルチャーショックの「ショック期」がどれだけシビアになりうるかを知っていたのもある)。滞在3週間になる頃には、「ママの夢のために、Aちゃんがなんでスイスにいなきゃいけないのよー」「なんでママはお仕事する人なのよー」と母を責める言動も増えてきた。5月に入ってから、小さなボーダーラインと命名できそうなほどの混沌ぶりであった。一時的に小康状態になっていた二次性夜尿、夜驚症など、相当混沌とし、睡眠不足で母子ともに疲労困憊の日々であった。

### 3. 異文化理解の芽生え：自他の差異の認識

この混乱の一方で、この時期、Aは日本とスイスの差異について意識化するプロセスを進んでいくのである。以下はそのいくつかの典型的なエピソードである。

**エピソード1**：この時期のAの最大の不満として、公園での遊具、特にブランコを巡って、スイスではみんなで並ぶということが全くないこと挙げられた。乗りたい子は、誰かが乗っていても、そのブランコをぐいと引っ張って無理やりに乗ろうとすることに、Aはショックを受けて泣き、言語ができないので、どう言っているのか分からないという。

これは、自我意識が発達する際に、日本では早期から「集団の意識」という視点が重視されることと関連するであろう。Aは、1歳になる前から日本の保育園文化で育ち、全員が平等であること

を重視し、ブランコも一列に並び、「順番順番」と言い合いながら、お互いに察し合い、譲り合うという「集団の中の一員」としての自我意識を非常に強く持っていた。その一方、スイスでは「個の意識」が重視されており、相手に察してもらうのではなく、「自分がしたいこと、自分の気持ち」は主張する必要がある文化である。幼児であってもその二つの対照的な自我意識のあり方で葛藤を生じていたことが示唆されている。

そこで、このようなエピソードが続いた際に、母から次のような話をAにしている。日本の保育園では「順番に」「みんなで」ということが大事と教えられてきたけれど、スイスでは「自分がどうしたいか」のほうが大事なかもしれない。だからお友達もAが思っている「いじわる」でしているのではなくて、順番に待つということをしなだけかもしれない。だから、Aも本当にやりたいものは遠慮せずに自分で取りにいったらいい。もし本当にブランコをやりたければ、「Nein! (No)」「Warte, bitte! (Wait, please)」と言ってごらん。そうすれば、お友達は、Aが本当はやりたいんだなと思って、その時には待ってくれるよ、と。

当初Aはこの「Nein!」という否定の言葉を日本にいる頃から家族以外の他者に言うことが難しい面があった。母の話聞いても、「そんなこと言えないよ」と泣いていたが、さらに何度かブランコが取られる出来事が続いたあと、「もう、腹が立つ!」とブランコを取る相手に腹を立て始めた。泣くという受け身な姿勢から怒りに変化したのである。怒りは、日常生活の中ではネガティブなものに見なされがちではあるが、臨床実践の中で自我発達の視点から見れば、自と他を区別するある意味非常にポジティブな原動力となる感情である。そして、この時にもまさに怒りがAの自我発達をさらに進める原動力になったといえよう。Aは次に同じようなことが起こったとき、「Nein!」ととても大きな声で相手に伝えた。相手は一瞬びっくりした表情を見せながら「OK」と言い、Aがブランコをするのを見守ったのである。そして、Aも嬉しそうにしばらくブランコをこいだ後、その子にブランコを渡すと、その子も「Danke! (Thanks)」と笑顔で返したのである。

この体験は、Aにとっては、自分の気持ちを大切にして相手に断っていいこと、そしてそれが関

係性を壊すことはないこと、自分の気持ちも相手の気持ちも大切にすることを学ぶ経験となったのだろう。集団の意識と個の意識は、対照的ではあっても、両立しうるのである。

エピソード2：公共交通機関に乗っていると、集団で遠足に出かけている他の幼稚園の子ども達と出会い、じろじろと見られることが多かった。Aは「スイスの子は嫌だ。あんな風にAのことじろじろ見て。Aのことおかしいと思っているからだ」と怒った。

これに関しては、母が日本に在住経験のある先述の友人に意見を聞いてみると、「スイスの子どもたちは、相手と友達になりたいときにじっと見ると言うことをする。日本文化のように相手をじろじろ見るのは失礼だという発想がない」という。この視点は、私もその発想がなかったため、この友人の話をそのままAに伝えたところ、Aは「あ、そういうことなの。Aと友達になりたいのか」と納得した。それ以降、Aはじろじろ見てくる相手になっさり笑いかけるという術を身に着けた。すると、相手もかわいい笑顔を返してくれるので、ここを通わせ合う微笑ましい体験になった。ここで生じていたのは、まさに、リフレーミングの手法である。カルチャーショックのショック期は自己中心的な視点から異文化を体験し、異文化を否定することで生じてくるが、異文化に生きてきた他者の視点は自分の視点とは異なるのかもしれない、その自他の視点の違いには、日本とスイスという文化の違いが関係しているのかもしれない、ということに幼児ながら気づく体験になったと考えられる。

### (3) 異文化適応の深化

このような混乱のプロセスを経ながら、5月には、少しずつAの異文化適応を促進するような出来事が増えてくる。Oberg(1960)は期間を区切っているが、実際にはその期間は明確に時系列的に区切られるものというよりも、層構造のようにそれぞれの期間が重なっていて、どの層が前景化するかは、螺旋階段が回りながら深化していくのに類似していると考えられる。

エピソード3：5月に入ると、Aの友人関係に拡がりが出てくる。その大きな転機になったのが、幼稚園の年下の友達の誕生日会に呼ばれたこと

である。スイスの、というよりも当該幼稚園の誕生日会はかなり派手で、自宅やレンタル会場で10人から20人くらいの友達を呼んで行われる。そして、誰かの誕生日会に呼ばれるということは、その子にとって特に大切な人であるという意味を持つ。そこにAは入園1カ月もたたないうちに呼んでもらった。Aにとって、人生初のお誕生日会へのお呼ばれ体験であり、招待を受けたということで、自分は友達から受け入れられているのかもしれないという体験になったようである。それは、スイスでも日本でも変わらない、個と個との関係性に関わっていくプロセスである。

エピソード4：この時期、Aは泣きながら通園していたが、スイスでは、外で子どもが泣いている姿を見かけることが非常に少なく、心配そうに見守ってくれる人が多かった。近所のお年寄りや店の人、他の私立幼稚園に通う親子などが、Aの様子を気にかけてくれていた。特に、同じ通学路で通うきょうだいが毎日のようにAに話しかけてくれていた。彼らはスイスドイツ語しか理解しないので、最初母が少ないスイスドイツ語の語彙とジェスチャーを駆使しながら、「パパが日本にいて、会えないからさみしくて泣いているのよ」など理由を説明すると、「今日Aは大丈夫？」など話しかけてくれるようになった。このように、自分のことを気にかけてくれ、ほんのささいな会話を交わせるような他者が増えていくプロセスも、Aにとっては地域に根付いていく大切な意味を持っていたと考えられる。

エピソード5：5月末頃より放課後皆が集まる公園での遊びでAが不機嫌になることが増えてくる。特に、卓球台の上に女子5～6名が円座して、おやつを食べながらおしゃべりすることがトリガーになっていた。この頃になると、幼稚園に慣れて、意識的には自分にも友達もいると思えるがゆえに、余計言葉の問題でうまく女の子グループ特有のおしゃべりに入れえないストレスが大きくなってきた様子である。この頃になると、相手の言うことはかなり分かっている様子を見せていたが、自分から言葉を発することができないフラストレーションが大きくなったのだろう。

そんな時に助け船になったのが、おしゃべりよりも体を使った遊びを優先する男の子達である。この幼稚園の男子が皆ジェントルマンで、Aがア

ストレッチで困っているとすぐ手を差し伸べて助けてくれたりして、日本の保育園男子相手ではなかなか体験できない経験をしている。そして、Aの側にも「Bくんはやさしいね」と、相手の性格や個性についてのコメントや友達に感謝する言葉が増えてきた。それは、エピソード2で相手を「スイスの子」として集団として一括りにしていた態度とは対照的である。つまり、Bくんという相手を、「スイスの子」、つまり国籍でまとめて集団として捉えるのではなく、名前を持った個として捉え、その国籍や人種といった表層の差異ではなく、個としての人間同士の共通性・普遍性に基づいた関係性に焦点がシフトしてきたのである。また、Aや男子達が楽しそうに遊ぶ声に刺激されて、他の女の子たちも合流し、全員が楽しく遊べる雰囲気が醸成されたのである。

この変化の背景には、実は他の保護者たちの支援がある。他の保護者たちがAの適応の様子を常に見守ってくれ、筆者がAの不機嫌などの背景にある気持ちを話すことで、それぞれの保護者が子どもたちにAのことを気に掛けるよう、さりげなく伝えてくれていたのである。Aが不機嫌になるのは、Aがお友達のことを嫌いだからではなく、お友達のことは大好きだけれども、スイスドイツ語でまだうまく話せないことが悲しくなってしまうこと、日本にいるパパやお友達に会いたい気持ちになること、でもスイスのお友達とももっと仲良くしたいこと、などである。つまり、エピソード1で筆者がAにスイスの子ども達の行動の意味を説明したのと同様、Aの一見不可解な言動の意味を子ども達が理解できるよう、保護者がサポートしてくれていたのである。

**エピソード5**：6月後半に、Aが憧れている友達（いつもプリンセスのような恰好をしている女の子）の誕生日会に招待された。その時、自分が選んだプレゼントを一番喜んでもらえたこと、ケーキを食べるときの主役の隣の席（親友席）に自分が座らせてもらったことが、Aの自信につながったようである。自宅に戻って非常に喜んでいて、急に、そのお誕生日会ではその友達の両親がそろっているのを見て、父を恋しがり、「日本に帰る」と号泣している。

このように異文化適応は一直線に進むものではなく、一段適応が進んだかと思うと揺り戻しが

あるというように、螺旋状に進んでいくものであることを理解しておくことは、幼児の異文化適応を支援するうえで重要であろう。しかし、この友人にとって大切な友達であるという自分の意味を確認して自信を深めた翌日から、突然Aはスイスドイツ語を話しだし、カルチャーショック段階を越え、適応が一気に進んでいく。

実際、この数日後、パパ友から信じられないことを聞くことになる。「今日Aが電話に出てきたよ」というのである。驚きで嘘扱いしそうになったが、確かにAが”Montessori Kindergarten. A spricht! (モンテッソーリ幼稚園です。Aです)”と電話に出て、友達の父だということも理解して、先生に電話を替わったという。Aに話を聞くと、実際に電話に出た、電話の話し方は仲良しの友達が教えてくれ、出るように励ましてくれたというのである。モンテッソーリ幼稚園では、子ども達の自立心を育むために、幼稚園で大切な仕事を子どもたちに任せていた。電話という、外に向けて重要な仕事を自分に任されたということをAは誇りに思っているようであった。その翌日他の保護者達からも我が子からAが電話に出たことを聞いたという話があり、そして、保護者達も我が事のように喜んでくれ、Aにも友達のパパママが褒めてくれていたことを伝えると、本当にうれしそうであった。

このように、日本だけでなくスイスにも自分のことを見守ってくれる他者がたくさんいるということを繰り返し実感できたことは、Aの異文化適応を支えてくれる最も大きな要因となったと考えられる。Aは、父親や乳児期から通う保育園の先生や友達、祖父母などの日本での長年の愛着対象から分離して、母一人について来ざるを得なかった。その中で大きな不安を感じていたが、スイスに来て、モンテッソーリ幼稚園の先生、幼稚園の友達とその家族、日本人学校補習校幼稚部の先生やそこでの友達とその家族、母の友人とその家族、日本人ベビーシッターといった具合に、スイス・日本を問わず様々な人との間で同心円状に様々なサポートネットワークが形成されていった。その中で、日本と変わらず、幾重にも自分自身が守られている実感を積み重ねていくことが、スイスを自分自身の居場所として捉えることにつながったものと考えられる。

## エピソード6

スイスの教育年度は8月に始まり7月終わりである。7月半ばの年度終わりの学習発表会では、子ども達が日頃の学習の成果を発表するのだが、親たちが驚いたことに、子ども達全員が日本語で『きらきら星』を歌ったのである。急速にスイスドイツ語を話し出したとはいえ、まだ言語的ハンディがあるAが中心となれるプログラムとして先生が考案してくれた方法で、Aが日本語の歌詞で歌って聞かせ、子ども達が耳で覚えたとのことであった。Aも他の子ども達も親たちの反応を見て、とても誇らしげであった。Aは集団の中でも自然に溶け込んでいた。

この体験は、Aにとっては、当初の言葉が全くわからず、まるで赤ちゃんに戻ってしまったかのように、ケアをされるべき無力な存在としての自分ではなく、他者に何かをしてあげられる、他の子ども達にも一目置いてもらえる存在としての自分を再確認できる機会となり、有能な自分としての自己イメージを回復・再確立することにつながったようである。このように、異文化不適応で困難を抱えている幼児の支援を行う上で、自分にできることで他者から必要とされ認められること、それを通して健全な自己愛を育む経験を積み重ねることは、最も重要な課題であろう。Aの場合、幼稚園の先生も他の保護者も、本当に小さなことでもよくAのことを褒めてくれた。そして、それは子どもだけでなく、母である筆者の心理的支えともなっていたのである。それゆえ、異文化不適応を経験している幼児の保護者を支援する際には、できないことばかりに目を向けるのではなく、少しの変化の兆しにも目を向け、ともに喜べるような心理的守りとなる関係性が大切であろう。

その後のAは、夏が終わる頃までは父親と話した後父恋しさに日本に帰りたく泣くことがあったが、夏休みにスイスでしかできない経験をたくさん楽しむことで、スイス生活の良さを実感でき、父親にスイスならではの体験を笑顔で報告できることが増えた。特に、日本の普段の生活では体験できないような大自然の中で遊ぶことは、Aにとって元気になる体験であり、忘れがたい思い出になったようである。

また、夏が明け新年度からは、自分が最高学

年になったことも相まって、Aは幼稚園で年少の子ども達の世話役の中心を担い、先生や子ども達に頼られる存在になった。モンテッソーリ教育の特徴は少人数異年齢保育であり、20人くらいの3歳から6歳までの子ども達が一緒に生活をしている。小さな子たちは言葉があまり必要ない相手なので、Aにとっては表情やジェスチャーで関係を築きやすかったようである。また相手がなついてくれることで、自分の存在意義も感じやすかったのだろう。元々日本の保育園でも小さな子どものお世話が好きで、先生からも褒められてきたこともあり、日本とスイスの自分の連続性を見出したようであった。そして、同じく言語の発達途上にある年少の子どもと話すことは、スイスドイツ語の言語習得上も大きなメリットとなった。夏以降、Aはスイスドイツ語では全く苦勞しなくなり、スイス人からスイスネイティブに聞こえると言われるようになるまで上達した。「スイスも日本もどっちも好き」であり、好きな食べ物も「ソーセージ、チョコレート、ポムフリ（ポテト）、お寿司」とスイスと日本の名物が混在するものになった。ジェスチャーもすっかりスイス人になり、スイスドイツ語が分からない母と喧嘩をするときはわざとスイスドイツ語で言い返すまでになった（これは親としては腹が立つものである）。時折、このまま日本に帰国したらどうなるかなとリエントリーショックを心配する時もあった。

ちなみに、帰国して再度日本文化への適応が進むと、このスイスドイツ語力はほぼ3か月で完全に消失している。修得した期間と同様の期間でほぼ消失するのであり、子どもの異文化適応力を実感する出来事である。しかし、スイス生活で鍛えた個の意識、自我の強さに、母が苦戦するのは、また後日談である。

## 4. おわりに

本論では、自験例をもとに、幼児の異文化適応のプロセスでどのように意識の発達が見られるかに焦点を当てて検討を行った。その結果、異文化体験を通して、「個の意識」と「集団の意識」という2つの対極的な意識を統合し、また国や民族、人種といった表層の差異を越えた、人間としての普遍性・共通性の次元でのつながりを確立す



ることで、幼児の異文化適応が深化していると考えられた。

このような幼児の異文化適応に対する心理支援を行う際には、幼児の分離不安に十分に配慮し、一時的に失ったかに感じられる他者との間の心理的守りを、異国であっても変わらず得られることを幼児が実感できるように配慮することが必要だと考えられる。そのためには、幼児にとっても最も重要な他者である保護者が、積極的に現地での対人ネットワークを築き、幼児の居場所を確保することが肝要であろう。それは不登校の心理支援における基本的視点として、本人が「元気になること」「関係を育むこと」を目標とする「ネットワーク活用型心理援助」(田嶋, 2005)が目指すものと同じである。仮に、保護者自身が言語的な困難を抱えている場合には、グローバル社会の現代においては、ほぼどの国にも現地の日本人学校・補習校などの日本人コミュニティが存在しているので、そこで出会う現地文化に詳しい日本人の支援を依頼し、居場所づくりを進めていくことも可能である。ただし、首藤・伊多波(2015)などの先行研究で示唆される通り、日本人コミュニティだけに所属し、異国でも日本と変わらぬ生活をし、異文化適応を目指さない場合もある。どちらが良いか悪いかという視点ではなく、当該幼児にとってどの程度の異文化適応が望ましいのか、その個性に基づきながら、支援を行っていくことが肝要であろう。

本論は一事例に基づく一考察であり、母子滞在というかなり特殊な形態であることの影響も大きいと考えられ、他の事例に基づいて比較検討を行うことが今後の課題である。

#### 【付記】

このような貴重な機会をいただいた同僚の先生方、また現地での母子の生活の支えとなってくれた皆さまにこころより感謝いたします。

#### 【文献】

- 梶田 正巳, 川上 綾子. (1999). シアトルとシカゴ地域における日本人の子ども--異文化適応調査研究. 名古屋大学教育學部紀要 教育心理学科, 46, pp. 21-31.
- 梶田 正巳, 早矢仕 彩子. (2000). ポートラ

ンド日本語補習授業校の子ども達の異文化適応--学習・言語・アイデンティティ面から. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 47, pp. 1-23.

文部科学省. (2016). 海外子女教育の概要.

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/001.htm) (2020年1月31日取得)

中田 栄. (2002). 展望 子どもの異文化理解と仲間関係の展開についての発達の研究--子どもの発達と異文化適応の問題をめぐる今後の課題と展望. 応用教育心理学研究, 19(25), pp. 25-34.

中田 栄. (2008). 子どもの異文化適応(ポスター発表2). 日本行動分析学会年次大会プログラム・発表論文集, 26, p. 79.

Oberg, K. (1960). Cultural shock: Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, pp. 177-182.

首藤 敏元, 伊多波 美奈. (2015). アジアの日本語幼稚園に通う幼児の異文化体験と異文化適応. 日本教育心理学会総会発表論文集, 57(0), p. 199.

首藤 敏元, 近藤 茜, 伊多波 美奈. (2018). アジアの日本語幼稚園に通う幼児の異文化体験と異文化適応<教育科学>. 埼玉大学紀要. 教育学部, 67(1), pp. 11-27.

田嶋誠一. (2005). 不登校の心理臨床の基本的視点--密室型心理援助からネットワーク活用型心理援助へ. 臨床心理学, 5(1), pp. 3-14.